

11月3日、ラジオソングの追跡

梅田夏樹

【あらすじ】  
ラジオゾンデ。それは気象観測のため、毎日上空に放たれる白い気球。  
青年・誠二は、父から教わった技術で、毎年亡き母の命日にラジオゾンデを追う習慣があった。回収率は二〇%。  
しかし、今年はずった。  
彼は、ピツ：ピツ：と鳴るビーコン音を頼りに険しい霧の山へ踏み込んでいく。

【概要】  
ラジオゾンデとは、気球に吊るして飛ばし、温度、湿度、気圧、などの天気予報の基礎データを無線で地上に送る装置です。世界中で毎日決まった時間に放たれ、日本では午前九時と午後九時に観測されています。  
本作は、そのラジオゾンデを無線で追跡し回収することを趣味にしてきた家族を描きました。

【本編の文字数】  
5250文字ほど

【登場人物表】

高山誠二 (35) (27) 息子

高山勇蔵 (68) (60) 父

無線仲間

職員 A

○ 気象台・放流準備室（朝）

天井の高い、無機質な作業室。  
壁に「高層気象観測室」のプレート。  
白い気球にヘリウムガスが注入される。  
気球近くに置かれたラジオゾンデ。  
職員A、気球とラジオゾンデを紐で繋いでいる。  
気球に漏れないかチェック。  
職員A、無線機のマイクを手に取る。  
職員A「こちら高層観測室。予定通り、放球します」  
デジタル時計。二月三日08:27  
シャッターが開き、朝の光が差し込む。  
白い気球は膨らみ続けている。

○ 高山家・ガレージ（朝）

アンテナを立てた白い軽四駆が入る。  
運転席から高山誠二（35）が降りる。  
誠二、家の方を見上げ、玄関に向かう。

○ 同・和室（朝）

仏壇。高山聡子（享年56）の遺影。  
正座する高山勇蔵（88）。  
手を合わせている。  
仏壇の脇の棚。  
白いラジオゾンデが七つ、整然と並ぶ。  
それぞれに水色の油性ペンで日付。

「2019. 11. 3」

「2020. 11. 3」

：

「2025. 11. 3」

玄関の方から、明るい声。

誠二の声「ただいま」

勇蔵「：」

襖がすつと開き、誠二が顔を出す。

誠二「父さん。今日晴れてるね」

勇蔵、振り返るが、誠二はすでに居間の方へ歩いている。  
勇蔵、線香の火を消し、立ち上がる。

○同・居間（朝）

壁のカレンダー。

二月〰日に丸印。

誠二、何気なくそれを見る。

勇蔵が入ってくる。

勇蔵「お前が帰るのは、この日だけだな」

誠二「そうだったけ？」

誠二、窓際へ。

澄んだ秋の空を見上げる。

勇蔵「今年もやるのか」

誠二「もちろん」

勇蔵、ため息をつき、ソファに座る。

誠二「父さんも、来る？」

勇蔵「俺はええ」

誠二「そっか」

誠二、時計を見る。

〸時〽分。

誠二、部屋を出ていく。

勇蔵「勇蔵、窓外の青く澄んだ空を見上げる。」

○气象台・外（朝）

芝生の中、職員Aがラジオゾンデ付き

の気球を放す。

白い気球が、空へ舞い上がる。

○畦道・車内（朝）

見晴らしの良い畦道に軽四駆。

車内には、無線機や配線が並ぶ。

無線機から、ビーコン音。

ピッ：ピッ：

誠二、双眼鏡を覗く。

青空の中。ゆっくりと昇る白い点。

誠二「よし、ゾンデ確認！」

双眼鏡を置き、無線機つまみを調整。

誠二、アクセルを踏む。

車が畦道を走り出す。

○田舎道

軽四駆が、のどかな道を走っていく。

○軽四 駆・車内

助手席に固定されたノートPC。

地図アプリ上で、小さなカーが点滅している。

カーが、ゆっくりと移動。

誠二、空と道を交互に見ながら運転。

無線機のダイヤルを、わずかに回す。

ビーコン音が、少しだけクリアになる。

○田舎道・俯瞰

澄み切った空。

美しい山並みと田園風景。

その中を、軽四駆が走っていく。

高い空には、白い点のような気球。

○軽四 駆・車内

ゾンデ追跡用の受信機から、規則正しいビーコン音。

別系統のモバイル無線機、いつもの口

カル周波数からノイズ混じりの声。

無線仲間（声）「こちら JAISTO。誠二だろ、

聞こえてる？」

誠二、ハンドマイクを手取る。

誠二「こちら誠二、聞こえてる」

無線仲間（声）「やっぱり。：その走り方だ

と、ゾンデ追ってんだろ？」

誠二「よく分かったね」

無線仲間（声）「今日は二月の日だから。大

体わかるよ。去年も追ってたし」

誠二、少し照れたように笑う。

誠二「母さんの命日は、回収率百パーだから。

やらないと気持ち悪いんだよね」

無線仲間（声）「何年連続だっけ？」

誠二「：「年かな」

無線仲間（声）「さすがだな。ガキの頃から

仕込まれてるだけあるわ」

誠二「まあね」

少しノイズが入る。

無線仲間（声）「：お父さん、元気？」

誠二、言葉に詰まる。

誠二「：まあ：なんとか」  
無線仲間（声）「そうか。：気をつけてな。  
風が強いみたいだから」  
誠二「ありがとう」

○軽四駆・荷室

メッシュパネルに留められた家族写真。  
ラジオゾンデを抱えてはしゃぐ子供の  
頃の誠二と、笑顔の父・母。  
母だけが水色の服を着ている。  
走行の振動で、写真が小さく揺れる。

○葬儀場（回想）

祭壇中央に聡子の遺影。  
勇蔵（呂）、泣き崩れている。  
その背を誠二（27）がそっと支える。

○高山家・居間（回想・一周忌）

壁に掛けられたカレンダー。  
二月〇日に、丸印。  
勇蔵が、その前に立ち尽くしている。

○同・和室（回想）

仏壇。誠二が線香立てを整えている。  
襖が開き、勇蔵が入る。

勇蔵「：おい」  
誠二、振り返る。  
勇蔵「久しぶりに：ラジオゾンデ、追わんか」  
誠二「：」

○走る軽四駆・車内（回想）

現在と同じ白い軽四駆。  
運転席に勇蔵。助手席に誠二。  
誠二、膝の上に広げた地図を見ている。

勇蔵「二人で追うのは：、お前が子供のとき  
以来だな」  
誠二「：」

○田んぼ（回想）

稲刈りの終わった田んぼ。

勇蔵、走っている。

その先に、白いラジオゾンデの気球。

勇蔵、立ち止まり、拾い上げる。

畦に立つ誠二、思わず微笑む。

誠二「やったね！父さん！」

勇蔵「おう！」

勇蔵、ゾンデを大事そうに持っている。

回想終わり

○コンビニ前

誠二、ボンネットにもたれ、パンをか

じる。片手には紙コップのコーヒ。

誠二、空を見上げる。

晴れていた空の向こうに、薄い雲。

誠二「…」

コーヒを飲み干し、車に乗り込む。

○高山家・居間

窓辺に立つ勇蔵。

雲が広がり始めている。

勇蔵「…」

○同・勇蔵の部屋

年季の入った無線機器が棚に並ぶ。

勇蔵、部屋に入り、電源を入れていく。

受信機から、ノイズが立ち上がる。

勇蔵、椅子に腰を下ろす。

○走る軽四駆・車内

フロントガラス越しに上空を見る誠二。

雲が厚みを増している。

誠二「…」

○走る軽四駆・車内（回想・4年前・雨）

フロントガラスを激しく叩く雨。

運転席に勇蔵。

助手席の誠二、受信機のダイヤルを必

死に回している。

スピーカーからは、ノイズだけ。

勇蔵「：今年は無理だな」

勇蔵、ハンドルの切り、コンビニの駐  
車場に入っていく。

誠二「まだ探せるって」

車が停まる。

勇蔵、シートベルトを外し、ドアに手  
をかける。

誠二、思わず勇蔵の腕を掴む。

誠二「途中で諦めんなよ」

勇蔵「：ただの遊びだぞ」

ダツシユボードのデジタル時計。

二月三日。

勇蔵「辞めだ。まるで、母さんを探してるみ  
たいじゃないか」

勇蔵、ドアを開け、雨の中へ出る。

誠二「：」

誠二、決意したように運転席へ。

エンジンをかけ、アクセルを踏む。

車が動き出す。

背後で、雨音に消されそうな声。

勇蔵の声「おい！誠二！」

回想終わり

○走る軽四駆・車内（雨）

フロントガラスにポツ：ポツ：と雨粒。  
モバイル無線機から声。

無線仲間（声）「こちらJAISTO。誠二、雨降  
ってきたけど、そっちは大丈夫か？」

誠二「大丈夫。雨なら前もあつたし」

無線仲間（声）「無理だけはす：ザザッ：」

突然、ノイズが被る。

誠二、無線機のボリュームとスケルチ  
を調整。ノイズは消えない。

ゾンデ受信機のビーコン音が乱れる。

ピッ：ピッ：ピッ：。

雨が強まり、ワイパーを動かす。

誠二、ノートの裏を見る。

地図上のマーク、不安定に揺れる。

○高山家・勇蔵の部屋  
受信機から微かなビーコン音。  
勇蔵「：」

○走る軽四駆・車内（雨）  
誠二、ダイヤルを微調整。  
ピッ：ザッ：ピ：ピッ：ザザッ：。  
スケルチを少し緩める。  
ノイズが一気に増える。  
誠二「：」  
誠二、辺りを見渡し、ハンドルを切る。

○山裾の道（雨）  
細い山道の脇。  
軽四駆がハザードを点けて停車する。

○軽四駆・車内（雨）  
スピーカーから、乱れたビーコン音。  
ピッ：ザッ：ピ：ピッ：。  
誠二、目を閉じて耳を澄ます。  
ゆつくりとダイヤルを回す。  
ほんの数ミリ。  
ピッ：ピッ：。  
音が安定する。  
誠二、静かに息を吐く。  
雨が弱まり、次第に止む。  
誠二、凸画面の地図を見る。  
誠二「：」  
地図上のマーカーが安定する。  
誠二、紙の地形図を取り出す。  
ペンで小さく印を付ける。

○山裾の道  
軽四駆のエンジン音が止まる。  
誠二、車を降りる。  
リュックを背負い、片手に受信機、もう一方に手持ちのアンテナ。  
受信機から安定したビーコン音。  
ピッ：ピッ：ピッ：。  
誠二、山へと入っていく。

○山・獣道

藪の中を、誠二がアンテナをゆっくり振りながら進む。ピッ：ピッ：ピッ：倒木を跨ぎ、岩を登り、草木をかき分け、濡れた土に足を取られそうになる。アンテナを振る角度が、次第に小さくなっている。

○山中

霧が立ち込め、視界が白く曇る。ピッ：コン音が弱まる。ピッ：誠二、足を止める。受信機を耳に強く当てる。アンテナを慎重に動かす。ピッ：一瞬、音が少しだけ強くなる。誠二の表情がパツと変わる。誠二、歩き出す。迷いなく前へ進む。霧で曇った視界。前へ、前へ。足元の土が崩れ、体勢を崩す。そのまま、斜面を滑り落ちる。

誠二「」

○山中・斜面下

誠二、地面に倒れ込む。泥を払い、肩で息をする。周囲は濃い霧。受信機を確認。ピッ：ピッ：ピッ：微かだが、まだ鳴っている。誠二、リュックから紙の地図を取り出し、付けた印を見る。霧で周囲が見えず、位置が分からない。誠二「」電話をかける。

ガイダンス「電波の届かない場所にあるか……」  
誠二「……、通話を切る。」  
しばらく、その場に座り込む。

誠二「……」  
誠二、リュックの中からハンディ無線機を取り出す。  
電源を入れる。サーツというノイズ。  
誠二、迷いなくダイヤルを回す。  
マイクに口を寄せる。

誠二「JAISTO、こちら誠二。聞こえますか」  
応答なし。

誠二「JAISTO、こちら誠二。山中で転倒。現在地不明。応答できる？」  
応答なし。

誠二「……」  
誠二、ダイヤルをもう一段回す。

誠二「山の中で転倒：現在地、不明……。受信できる方、応答願います……」  
応答なし。

誠二、唇を噛む。

無線機のボタン操作。短い電子音。

誠二「レピータ経由。こちら誠二：山の中で転倒、現在地不明：誰か：応答願います……」  
応答なし。

誠二、岩の上に立ち、アンテナを最大まで引き伸ばす。  
腕を高くあげる。

誠二「こちら誠二：山の中で転倒、現在地不明：誰か！応答願います！」

誠二、力尽きたように座り込む。  
受信機を見つめる。

誠二「……」  
誠二、呼吸を整える。  
目を閉じる。

誠二「CG、CG：こちら、JAITSU：受信でき  
きる局、応答願います……」  
ノイズの音がほんの一瞬、変わる。

誠二、顔を上げる。  
勇蔵の声「：誠二？こちら勇蔵だ」

誠二「……父さん」

勇蔵の声「今どこだ。：行く。行くから待てる。動くなよ」  
誠二、力が抜け、ほっと息を吐く。

○山中（しばらくして）

霧が薄れていく。

木々の隙間から、柔らかな日差し。

安定したビーコン音。

ピッ：ピッ：ピッ：

誠二、驚き顔を上げ、遠くを見つめる。

霧の向こう。

苔むした石段、小さな社。

誠二「：」

誠二、立ち上がる。

ビーコン音に導かれるように歩き出す。

○石段

一段一段、階段を上がる誠二。

ふと、振り返り、立ち止まる。

来た道。

霧に包まれた山。

誠二、受信機を見る。

しばらく、そのまま立ち尽くす。

誠二「：」

誠二、受信機のスイッチを切る。

ビーコン音が止む。

静寂。鳥の声。

誠二、フツと息を吐く。

誠二「：今年は、ここまでかな」

× × ×

日差しを受けて光る葉の雫。

石段に腰掛けている誠二。

下から足音。

顔を上げると石段を上がって来る勇蔵。

手には受信機とアンテナ。

誠二、立ち上がる。

誠二「父さん！」

勇蔵、誠二に気づき、手をあげる。

木漏れ日の中、合流する二人。

○古び

た神社・境内の中央。

地面に落ちた、白く萎んだ気球。

絡まった紐の先に、ラジオゾンデ。

誠二、近づき、そっと拾う。

ラジオゾンデを勇蔵に渡す。

勇蔵、微かに微笑む。

水色の油性ペンを取り出す。

ラジオゾンデに日付を書く。

「2026. 11. 3」

誠二、微笑む。

静かな森と神社の前に立つ二人。

風が、木々を揺らす。

終わり